と開けますと、お侍が婦人を相手に一杯飲んでおられる處をガラツと開けましたので、お侍がフワと見ますと素裸で立つて居りますので、

「コリヤ無禮者奴、武士の借り請けたる部屋を、案内も無しに無斷で開けるとは何事ぢや、無禮千萬な、それへ直れ、手打にいたす」

「フワア……ア、恐やの」

「喜ィやんやないか、如何したんや大きな聲で、そんな處へ平太張つてからに」

「ア、恐、今は風呂やと思ふて開けたら侍と女とが差向ひで一杯飲んでよつたんや、出し抜けに開けたんで吃驚しよつて、武士の借り請けたる部屋を無斷で開けるとは何事ぢや無禮千萬な、それへ直れ手打にいたす云ふて長い刀を抜きよつたんで私も吃驚りして逃げて來たんや」

「阿呆やな、よう殺されなんだ事や、それで風呂へ這入つて來たんか」

「そらまだや」

「何を仕てるねん、私等お前が遅いので先に這入つて來たで」

「ア、そうか、そんなら私は後で風呂へ行くは、先に飯を食べる」

「膳が來てるね、どうや膳の上で一杯飲もか」

「否や止く」

「なんでや」

「そうやがな、こんな小さい膳の上に乘つたら膳がつぶれるがな」

「そうやない、飯の上で一杯飲もかと云ふねん」

「尻が飯だらけになるがな」

「違ふ、此の膳の肴で一杯飲もかと云ふね」

「そんなら解つてる、飲もう飲もう」

「オイ（ボン〳〵）姐はん、姐はん……」

「ハイ、お呼びやす」

「お酒を持つて來てんか」

「ハイ、かしこまりました」

と下へ降りました、程なくお酒が參りましたので三人で飲み始めました。

「ナア清やん」

「なんや」

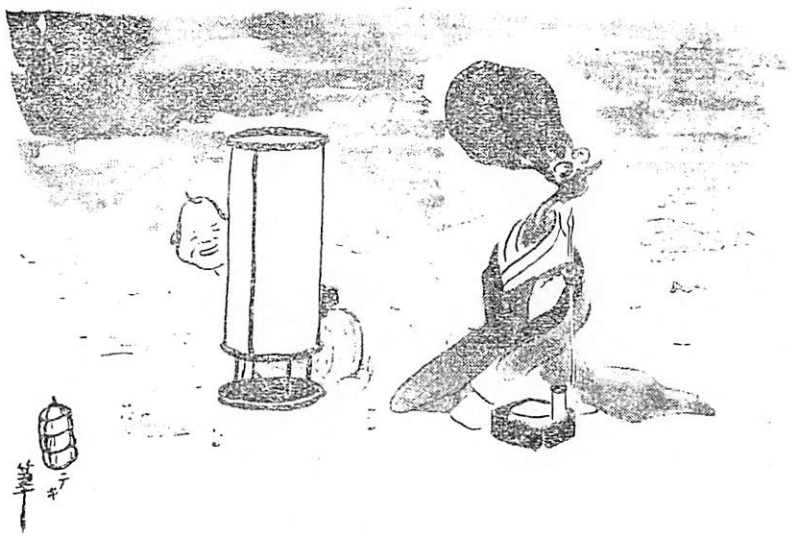
「先刻の侍の部屋に居た女、あれ何んやろ」

「あれが驛場の飯盛女とか、此處のおぢやれとか云ふのや」

「どうや、私等も旅の憂晴しにおぢやれを呼んだらどうや」

「イヤ、それも面白からう」

「ひとつ話の種に呼んでみよか」

「よかろう……オイ（ボン〳〵）姐はん、姐はん」

「ハイ、お呼びやす」